

北海道赤平高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 32名

1 取組の特徴

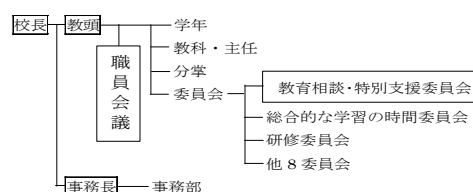
子ども理解支援ツール「ほっと」の結果から得られた課題をテーマに、各種講座（プログラム）を実施し、生徒・教職員のスキルアップを図る。さらに学び得たコミュニケーションスキルを活用する場を学校生活のあらゆる場面において意図的・計画的に設定する。

2 取組のねらい

コミュニケーション力のスキルアップを図る様々なプログラムの体験を通して

- (1) 自己理解の深化と自己肯定感の底上げ
- (2) 自他の尊重と思いやりある行動実践
- (3) 教職員自身のコミュニケーションスキルの向上と
 日常の学校生活における意図的・意識的な働きかけを目指し、生徒自身が自己実現・進路実現の基盤を築く。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|----|-----------------------------------|
| 4月 | 子ども理解支援ツール「ほっと」1回目 |
| 5月 | ピア・サポート講座Ⅰ 環境美化活動
スクールカウンセラー講座 |
| 6月 | 夏季体育大会 |
| 7月 | 学校祭 保健講座 喫煙防止啓発活動 |
| 8月 | ピア・サポート講座Ⅱ
教員研修会①ピア・サポート活動 |
| 9月 | インターシップ 薬物乱用防止教室
教員研修会②グループ学習 |

- | | |
|-----|-------------------------------------|
| 11月 | 見学旅行
デートDV防止出前授業
教員研修会③特別支援教育 |
| 12月 | 3年保健指導 冬季体育大会
子ども理解支援ツール「ほっと」2回目 |
| 1月 | メンタルヘルス講座
教員研修会④「ほっと」個別分析 |
| 2月 | 卒業お祝い&感謝メッセージボード作り |
| 3月 | 2年保健指導
教員研修会⑤今後の指導計画(個別) |

4 取組の内容

1 ピア・サポート講座Ⅰ

- (1) 日時 平成25年5月15日(木)
- (2) 講師 日本ピア・サポート学会全国理事
北海道支部副支部長(事務局長) 齋藤 敏子 氏
- (3) ねらい 「自分の意見を相手に伝える」をテーマとしたプログラムに取り組むことにより、子ども理解支援ツール「ほっと」の項目「発言や説明」のスキルアップを図る。



- (4) 内容 ビンゴ、一方通行、私のハートなど
- (5) 成果 各種エクササイズの実践から、自他の違いを踏まえ、双方通行のコミュニケーションの難しさを実感し、今までの自らの行動を振り返る機会となった。

2 スクールカウンセラー講座「ことばの大切さ～伝える、伝わる、わかり合う～」

- (1) 日時 平成25年5月28日(火)
- (2) 講師 臨床心理士(本校スクールカウンセラー) 河原 由紀 氏
- (3) ねらい 各種体験的プログラムを通してコミュニケーションをとることの難しさを実感し、生徒自ら「ことばの大切さ」について考えるきっかけとする。
- (4) 内容 自己紹介、伝言ゲーム、3つの約束など
- (5) 成果 生徒の感想から、自分のこれまでの行動を振り返り改善していこうとする様子が見られた。

4 取組の内容

3 ピア・サポート講座Ⅱ

- (1) 日時 平成25年8月21日(水)
- (2) 講師 日本ピア・サポート学会全国理事
北海道支部副支部長(事務局長) 齋藤 敏子 氏
- (3) ねらい テーマ「自分の人間関係の特徴を生かして活動しよう」としたプログラムに取り組み、コミュニケーション能力の向上を図る。
- (4) 内容 牛馬ゲーム、エゴグラム、しょげてるジャイアン、OTAK診断とメンターなど
- (5) 成果 昨年度から3回に渡る講座での取組を整理し、生徒同士の新しい人間関係づくりのきっかけとして、自己理解の視野が広がった。

4 薬物乱用防止教室

- (1) 日時 平成25年9月26日(木)
- (2) 講師 赤平市内薬剤師、赤平市介護健康推進課健康づくり推進係
- (3) ねらい 薬物依存による心身への影響について正しい知識を理解するとともに、決して他人事ではなく、自分自身も巻き込まれてしまう可能性があることを実感する。また、誘惑から身を守る方法を生徒一人ひとりが具体的に考え、行動につなげる。
- (4) 内容 薬物依存とその危険性についての講話の後、ワークショップ「やってみよう!〜どうやって断るか?」と題して、全員で脱法ハーブを勧められた時の対応についてロールプレイを行った。
- (5) 成果 昨年度も取り組んだロールプレイを繰り返すことで、アサーションスキルの向上につながった。

5 メンタルヘルス講座

- (1) 日時 平成26年1月17日(金)
- (2) 講師 北海道医療大学教授 富家 直明 氏
- (3) ねらい 「心の病は予防できる」をテーマに自分自身でメンタルのコントロール方法を学ぶ。
- (4) 成果 同じ出来事でも行動にポイントを置いて捉えることによって心持ちが違うことを学ぶことができた。



5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者及び不登校生徒数の推移
中途退学者：平成24年度 5名 → 平成25年度 0名
不登校生徒数：平成24年度 1名 → 平成25年度 0名
- (2) その他の指標
保健室利用者数：平成24年度 3029名 → 平成25年度 2037名(～1月末まで)
一人当たりの欠席日数：平成24年度 6.5日 → 平成25年度 4.0日
体験活動の参加者数：平成24年度 18名 → 平成25年度 11名
(在籍数 平成24年度 54名 → 25年度 32名)
- (3) 「ほっと」及び学級適応検査等について
「ほっと」の結果をもとに研修を実施することにより、生徒理解を深め、日常の学校生活において生徒のコミュニケーション能力を育成する場面を意図的に設定する意識が教員間に生まれた。本校は少人数のため、集団としてみることに並行して「個別に経時的変化を分析」することに取り組んだ。
- (4) 生徒の変容の姿
様々なプログラムを通して自己理解を深め、これまで以上に自分自身を肯定的に受け止め、他者との関わり方を見直そうとする姿勢が見られるようになった。また、異学年交流や地域活動への参加機会が増え、新たな人間関係の中でコミュニケーション力を育むことができた。

2 課題

- (1) 次年度は3学年9名のみの生徒集団になることから、コミュニケーション力を鍛える機会をさらに意図的に設定し、生徒ひとり一人の進路実現のための基礎としたい。

3 次年度に向けて

- (1) 生徒が獲得したコミュニケーションスキルを学校行事・生徒会行事など日常の学校生活で生かせるよう、教職員が意図的・意識的に働きかけていく。
- (2) 可能な限り地域の活動と連携して生徒が活動できる機会を設定し、コミュニケーション体験の拡大を図る。

北海道南幌高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 113名

1 取組の特徴

1年目の教員研修で習得したコミュニケーション能力育成に関わる知識や手法を活用して、新入生を中心としたプログラムの作成及び実践を行う。

2 取組のねらい

基礎的な学力や基本的な生活習慣の定着が見られない生徒に対し、様々な角度からのアプローチが必要と考える。コミュニケーション能力を高め、良好な人間関係作りを構築するとともに、自己有用感を高め、意欲的に学校生活を過ごす態度を育成する。

<組織図> スクールカウンセラー

校長・教頭

サポート

- SU担当(学年主任・生徒指導部)
- 学年
- 教科
- 研修委員会、特別支援教育委員会

3 取組の経過

- | | | | |
|----|-----------------------|-----|------------------|
| 5月 | 花壇造成 (PTA協同作業) | 11月 | 生徒会リーダー研修会 |
| 7月 | 南幌養護学校との交流学習会 I | 12月 | 南幌養護学校との交流学習会 II |
| | 校内研修 I Hyper-QUの分析と活用 | 2月 | 宿泊研修「集団カウンセリング」 |
| | 校内研修 II 特別支援教育に関する相談 | | 除雪ボランティア |

4 取組の内容

1 花壇造成

- (1) 日時 平成25年5月31日(金)
- (2) ねらい 奉仕の精神を学ぶとともに、PTAとの協同作業を通じて、コミュニケーション経験の拡大を図る。
- (3) 対象 全学年
- (4) 内容 本校敷地内の花壇6ヶ所をPTAの方々と一緒に土作りから苗植えを行う。



2 校内研修 I

- (1) 日時 平成25年7月4日(木)
- (2) 講師 札幌国際大学大学院教授 本間 芳文 氏
- (3) テーマ Hyper-QU検査の分析と活用
- (4) 内容 1年生を対象に行ったHyper-QU検査の分析方法と活用方法について理解を深め、学校生活での指導に役立てた。また、活用実践例を参考に、具体的なアプローチの方法について研修を深めた。

4 取組の内容

3 南幌養護学校との交流学習会Ⅱ

- (1) 日 時 平成25年12月13日(金)
- (2) ねらい 養護学校の生徒との相互のふれ合いを通じて、社会性や豊かな人間性をはぐくむとともに、互いに理解を深め人間関係を広げる。
- (3) 対 象 全学年
- (4) 内 容 養護学校の生徒と餅つきを行い、雑煮やピザ餅等を一緒に作り、食べながら交流を深めた。

4 宿泊研修

- (1) 日 時 平成26年2月7日(金)
- (2) 場 所 北海道立青年の家
- (3) 講 師 社会教育主事 村澤 泰志 氏
- (4) テーマ 人間関係作りトレーニング
- (5) 内 容 入学してから、これまでの友人関係で得られた情報をもとに、更なる人間関係を築くために「誕生日ゲーム」「名前並べ替えゲーム」等を実施した。
様々なプログラムを通して自他の新たな一面に気付くことができた。



5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
中途退学者数 平成24年度 23名 → 平成25年度 9名 (H26.1月末)
不登校生徒数 なし
- (2) その他の指標による評価
保健室年間利用者数 平成24年度 1,270名 → 平成25年度 865名 (H26.1月末)
一人当たりの欠席日数 平成24年度 6.4日 → 平成25年度 5.3日 (H26.1月末)
- (3) 生徒の変容した姿
学校生活における生活習慣について、自己管理できる生徒が増えた。

2 課題

- (1) 新入生への人間関係作り、集団作りへの働きかけを計画的に取り組む必要がある。
- (2) 計画的な校内研修の実施と内容の充実が求められる。

3 次年度に向けて

- (1) 学校行事の時期等の見直しと新入生への早い段階での働きかけを行う。
- (2) 様々な検査結果の分析とそれを有効に活用するための教員研修を実施する。

北海道札幌北高等学校

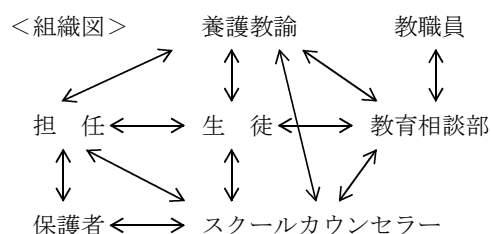
課程 全 日 制
 学科 普 通 科
 生徒数 9 6 2 名

1 取組の特徴

- ・スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施
- ・スクールカウンセラーを活用した校内研修の実施

2 取組のねらい

友人関係をはじめとした人間関係の形成や、学習に関連して自己に対する悩みを抱える生徒への支援を充実させるため、特別な支援を必要としている生徒への校内支援体制を整備するため。



3 取組の経過

- | | |
|--|----------------------------------|
| 4～5月 仲間作り、クラスづくり | 6月 MG検査分析 |
| 4～3月 個別カウンセリング
教員へのコンサルテーション | 10月 校内研修会
(スクールカウンセラーを交えた) |
| 4月 オリエンテーションやPTA総会にてス
クールカウンセラーに関する広報活動 | 11月 PTAと教職員研修会
(講師スクールカウンセラー) |
| 4月 スクールカウンセラーたより発行 | 12月 生徒理解のための会議 |
| 4月 MG検査実施 | |

4 取組の内容

MG検査で判定された性格診断プロフィール及び問題傾向についての結果を、生徒一人一人に配付し、生徒の自己理解につなげた。また、その結果について、スクールカウンセラー、学級担任、教育相談部、及び養護教諭が共有し、生徒理解を一層深めるために活用した。特に性格診断プロフィールや問題傾向の各項目に「1」や「A」の判定が出た生徒や人数を把握し、他学年との比較検討を行い、学年や教育相談部及び保健室での生徒支援に活用した。

スクールカウンセラーによる生徒へのカウンセリングは、2月までに93件行われた。カウンセリングの件数の内訳は、4月6件、5月12件、6月7件、7月6件、8月7件、9月11件、10月12件、11月10件、12月9件、1月8件、2月3件であった。カウンセリングにおいて、

生徒は、カウンセラーに自分自身の悩みなどを打ち明けることにより、学校生活から生じる精神的重圧や負担を軽くすることができた。また、カウンセリングの内容は、教育相談部を通じて、担任や養護教諭に共有され、生徒一人一人の学校生活への支援に役立てることができた。

スクールカウンセラーを交えた校内研修会では、スクールカウンセラーから「生徒の心理的支援のために考えたいこと」と題する講演をいただき、教育相談を必要とする生徒の背景、本校生徒の特徴、支援のための手段等について研修を深めた。また、本校生徒のカウンセリングの事例について解説があり、生徒との具体的な関わり方について示唆をいただいた。苦悩する生徒と関わりを持つ教師は、日々、暗中模索の感が否めない。しかし、校内研修会をとおして、生徒理解が深まることにより、今後の生徒との関わり方に道筋が見えてくるとともに、教職員全体による協力体制の意識も強められた。



5 次年度に向けて

1 成果

- ア スクールカウンセラーの派遣による、生徒及び保護者へのカウンセリングと、担任及び教育相談部とのコンサルテーションを実施することができた。
- イ スクールカウンセラーを交えた校内研修を実施し、カウンセラーの立場からカウンセリングの概要と本校教育相談対象生徒の特徴と対策について、研修を深めることができた。また、事例研究を通して、生徒の状況と対応策について確認し、教職員間で共通認識を持つことができた。
- ウ 保護者と青年期の心理について教職員間で共通理解を持つことができた。

2 課題

- ア スクールカウンセラーによるカウンセリングについては、生徒・保護者には好評である。しかし、MG検査の数値評価が生徒の実態と見合わない部分もあり、成果をどのようにとらえるかについて検証する必要がある。
- イ スクールカウンセラーを交えた校内研修では、生徒の状況や対応策について確認し、共通認識を持つことができた。しかし、今後、教職員による生徒への支援をどのような形で行うことができるか検討をする必要がある。

3 次年度に向けて

本校は道内有数の進学校であるため、学業の不調に関する悩みを持っている生徒が多い。そのことに付随して、登校への不安、進路等の悩みによる情緒不安定、心身の不調、対人や家族関係等に悩みを持つ生徒もいる。学校の特質上、教育相談対象生徒は今後も減少しないことが予想される。このような生徒に対して、スクールカウンセラーを活用し、有効な対策を立て、支援を行い、さらに検証を進めていく必要がある。

北海道札幌手稲高等学校

課程 全 日 制
 学 科 普 通 科
 生徒数 9 5 6 名

1 取組の特徴

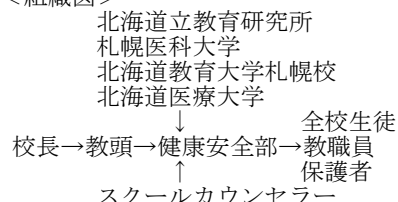
子ども理解支援ツール「ほっと」を実施し、生徒のコミュニケーションスキルと教職員の指導力の向上を図るとともに、保護者への講演会等による予防的支援と事例研究を行い臨床心理士等による心理的精神的な支援を行う。

2 取組のねらい

子ども理解支援ツール「ほっと」の活用に関する研修とコミュニケーション実践プログラムの開発、講演等を行い、生徒のコミュニケーションスキルの一層の向上を図る。

保護者に青年期の心理や行動特性に関する講演等を行い子ども理解を図る。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>4月 1年次アイスブレイク①</p> <p>5月 宿泊研修大雪青少年交流の家での集団
カウンセリング</p> <p>6月 全学年子ども理解支援ツール「ほっと」
の実施
e-ネット安全講話 (全年次)
インターンシップオリエンテーション
(1年次)
事例研究 (2年次)</p> <p>7月 事例研究及び個人面談 (1, 2年次)</p> <p>8月 事例研究及び個人面談 (全年次)</p> <p>9月 講演「子ども理解支援ツール『ほっと』
の活用」(教職員対象)</p> <p>10月 インターンシップ (1年次)
薬物乱用防止教室 (全学年)
講演「子育てに関する講演会」(1年次
保護者対象)
講話「受験期のメンタルヘルス」(3年次)</p> | <p>11月 講演・演習「人間関係を楽にするコツ
を身につけよう」(2年次)
事例研究及び面談 (1, 2年次)
実践プログラム作成に関する研修会～
ピアサポートを中心に～
保護者対象薬物乱用防止教室</p> <p>12月 事例研究及び面談 (1年次)</p> <p>1月 コミュニケーションスキルトレーニング② (1年次)</p> <p>2月 本事業の課題と成果のまとめ
年度末反省</p> <p>3月 次年度への計画</p> |
|---|--|

4 取組の内容

1 生徒を対象としたコミュニケーションスキルトレーニング

○1年次 4月にはバースデイラインや人間知恵の輪によるアイスブレイクを行い、1月には子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を踏まえた「思いやり」「称賛」「助言や注意」「相談」の項目についての改善を目的として、ピアサポートの考え方を取り入れたトレーニングを実施した。生徒からは「普段なかなかできないことができ楽しかった」や「クラスの雰囲気明るくなった」などの感想があった。



○2年次 講演・演習「人間関係を楽にするコツを身に付けよう」では、困っている友人にどのようなアドバイスができるかについて、グループに分かれて話し合い発表を行った。生徒からは「自分はネガティブに考えてしまう性格なので『つぶやきチェンジ』を試してみたい」、「友人から相談された時に、その人の立場になってよく考え、アドバイスしたい」などの感想があった。



○3年次 健康講話「受験期のメンタルヘルス」では、生徒が日々の生活の中で抱えるストレスや、その対応の仕方について説明・助言があった。生徒からは「受験期の心理状態を客観的にとらえることができた」等の感想が、担任からは「受験期のメンタルヘルスを踏まえた言葉かけや配慮事項についてよく理解できた」などの感想があった。



2 教員を対象とした生徒指導に関するスキルアップ

9月に子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を活用する方法等について、北海道医療大学心理学部臨床心理学科教授の富家直明氏にご講演いただいた。子ども理解支援ツール「ほっと」の結果の概要については、全体的にコミュニケーション能力が高く何でもできる集団であるが、個別に見るとSOSを出しているとの説明をいただいた。また、「緊張」の度合いが高いことから、不登校になる可能性が高くメンタルヘルスの問題が懸念されるため、これらを未然に防ぐために、日々の指導においては将来を悲観する考え方や言葉に配慮する必要があるなどの助言をいただいた。



3 保護者を対象にした青年期の心理や行動に関する情報提供

10月に「子育てに関する講演会」を開催し、臨床心理士の朝日真奈氏に御講演いただいた。講演では子ども理解支援ツール「ほっと」の分析結果を踏まえ、子どもが受験勉強等に集中する時間が多い緊張度の高い学習環境の中で、保護者はどのように子どもと関わるべきかについてお話いただいた。講演後、健康安全部長が本校での高校生ステップアップ・プログラム事業に関する取組について説明を行った。



5 次年度に向けて

1 成果

- ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
支援体制が一層充実し、予防的な効果があった。
- イ その他の指標による評価
事業実施後のアンケートでは、生徒はコミュニケーショントレーニングの必要性について理解し、「拒否」、「助言や注意」、「相談」、「緊張」等に関するトレーニングに楽しんで取り組んでいることが分かった。
- ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
1年次について、「拒否」、「助言や注意」、「相談」が低く、「緊張」は高い。男子では「思いやり」、「称賛」、「相談」、女子では「拒否」の項目に特徴が見られた。この結果を、次年度の学年経営等に生かしたい。
- エ 生徒の変容した姿
生徒は1年次に行われるインターンシップの経験を通して、コミュニケーション能力が求められていることを実感しているため、次の3つの内容をコミュニケーションスキルトレーニングとして行った。
 - ① 表情やジェスチャーだけで相手の感情を判断することの難しさを体験することにより、言葉の大切さを理解する
 - ② 自分が相手に話をした時に、関心がない態度で聞かれた場合や、関わりを持とうとする態度で聞いてもらった場合に、どのように感じるのかを体験する
 - ③ 相手から頼まれたことを断る体験を通して、相手の気持ちを尊重しつつ、自分の意思を上手に伝えるための話し方の工夫について考える

このトレーニングを実施した後、次のような変容が見られた。

- ① 相手の気持ちを考えてコミュニケーションをとるように心がける生徒が一層増加した。
 - ② 適切な言葉を用いて相手へ自分の意思を伝えようとする生徒が一層増加した。
 - ③ 場をわきまえて感情を上手にコントロールしようとする生徒が一層増加した。
 - ④ 相手の状況を考えながら話を聞こうとする生徒が一層増加した。
- これらの成果により、クラス全体の雰囲気明るくなったと感じる生徒が多く見られた。

2 課題

- ア 臨床心理士等の専門家を活用し、事例の検討等を行い、教職員の生徒理解や個別の指導の充実を図る必要がある。
- イ 本事業の取組に係る情報を効果的に発信する必要がある。
- ウ インターンシップなど総合的な学習の時間や特別活動で取り組んでいる事業でのトレーニングプログラムを作成する必要がある。

3 次年度に向けて

- ア 臨床心理士等の専門家を活用した生徒一人一人への支援、及び教職員の指導力のさらなる向上
- イ Web ページ等による本事業の取組に係る情報の発信

北海道札幌真栄高等学校

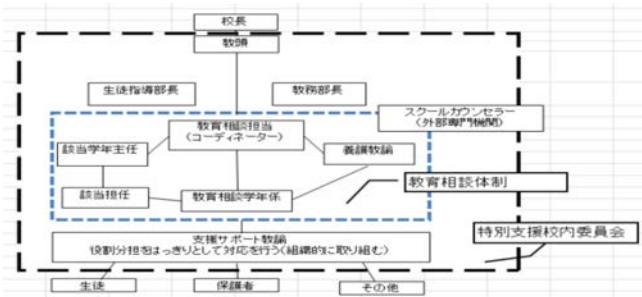
課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 694名

1 取組の特徴

スクールカウンセラーによる年25回の生徒へのカウンセリング（個別相談）や、教員や保護者への指導と助言など、学校における教育相談の充実を図る。

2 取組のねらい

カウンセラーによる個別相談を受けることにより、生徒は学校生活への支援に役立てるとともに、教職員は、生徒への早期対応と効果的な支援の方策を探り、校内の支援体制の確立を進める。



3 取組の経過

通年	スクールカウンセラーによる年25回の個別相談	7月	保健委員、美化委員による学校祭時のクリーンキャンペーンを実施
8、9月	班作りや自主研修計画など、2学年の見学旅行に向けた人間関係づくり	1月	DV、妊娠等をテーマに、1年生向け「思春期ヘルスケア」の実施
4、1月	子ども理解支援ツール「ほっと」の実施（1年生、2年生対象）		

4 取組の内容

- 1 年間を通して、スクールカウンセラーによる個別相談を実施した。
 - ア 一人40分でカウンセリングを実施（2月19日現在、22回実施）
 - イ 生徒15名が通年でカウンセリングを受けた。（延べ54回）
 - （1年生）女子3名、男子1名（夏休み以降増加する傾向があった。）
 - （2年生）女子6名、男子2名（クラス替えのため、年度初めの相談が多かった。）
 - （3年生）女子2名、男子1名（前年度からの継続だが、夏休み明けは相談なし。）

4 取組の内容

- 2 LHRで、見学旅行に向けた班づくりや、見学旅行先である長崎、京都・大阪の自主研修の計画づくりを通して、人間関係づくりを行った。
- 3 学校祭の一般開放に向け、バザーや模擬店を利用する生徒や保護者、一般客の出すごみの処理や声かけを通して、校舎内の美化意識やごみ処理に対する注意を喚起することができた。
- 4 子ども理解支援ツール「ほっと」を4月と1月に実施し、クラスの傾向を把握した。
- 5 清田区子ども課健やか推進係による1年生を対象とした「思春期ヘルスケア」講演を実施した。



5 次年度に向けて

- 1 成果
 - ア スクールカウンセラーによるカウンセリングの有効性と、早い時期にカウンセリングを受けることの重要性が、生徒、教員及び保護者に浸透した。
 - イ 教育相談や支援を必要とする生徒が、カウンセリングを継続的に受けることにより、自らの状況を客観的に把握できるようになるとともに、比較的短時間で通常の学校生活に戻ることができるようになった。
 - ウ 生徒の共同作業による見学旅行自主研修の計画づくりは、新しい友人関係や良好な人間関係を築くとともに、旅行後の学校生活にもよい雰囲気をもたらした。
- 2 課題
カウンセリングを継続して希望する生徒が増加したことにより、カウンセリングのための時間の確保、生徒の割り振り、効率的なカウンセリングの実施等について対応する必要がある。
- 3 次年度に向けて
 - ア 「ほっと」の活用方法の研修
 - イ 教育相談や支援を必要とする生徒への組織的体制の確立
 - ウ 教員向け研修会等の企画

北海道札幌琴似工業高等学校

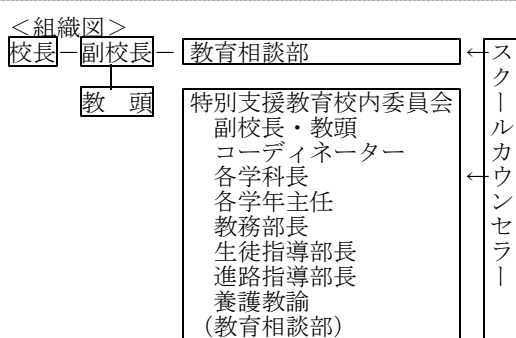
課程 全日制
 学科 工業科
 生徒数 921名

1 取組の特徴

予防的・開発的教育相談を通して、日常の学校生活はもちろん進路実現や社会において不可欠なコミュニケーション能力のスキルアップを図る。

2 取組のねらい

- ・生徒のコミュニケーション能力育成のためのトレーニングの実施。
- ・生徒のコミュニケーション能力育成を推進するための教職員研修の充実。



3 取組の経過

※ 個人面談は通年（不定期）で実施

- 6月 スクールカウンセラーによる教職員研修
- 7月 アセス（1回目）実施 対象：1学年
- 9月 アセスに関する教職員研修
 - ・対象：1学年担任
 - ・アセスの結果分析と、データの読み取り方、利用法について
- 10月 スクールカウンセラーによるコミュニケーションスキルアップ教室（1回目）
 - ・対象：1学年1学級
 - ・スマイルトレーニング
 - ・コミュニケーションスタイルの見直し
 - ・生徒の感想のシェアリング
- 11月 アセス（1回目）実施 対象：2学年
 - ・スクールカウンセラーによる教職員研修
 - ・対象：1学年担任
 - ・10月実施のコミュニケーションスキルアップ教室に関するシェアリング

- ・学級経営に関する質疑応答と、教室で実践できるコミュニケーションスキルアップの方法紹介
- 12月 スクールカウンセラーによるコミュニケーションスキルアップ教室（2回目）
 - ・対象：1学年1学級（10月実施クラス）
 - ・スマイルトレーニング（復習）
 - ・ほめっせーじを大事にしたコミュニケーション
 - ・生徒の感想のシェアリング
- 1月 アセス（2回目）実施
 - ・対象：1学年
- 2月 アセスに関する教職員研修
 - ・対象：1学年、2学年
 - ・アセスの結果分析と、データの読み取り方、利用法について
 - ・今年度の反省

4 取組の内容

1 アセスの実施

本校では、これまで、生徒の実態を把握するためのアセスメントを継続的に実施した実績がなかったため、スクールカウンセラーと担当で協議し、学校環境適応感尺度「アセス」を実施した。今後の継続実施を考慮して、今年度は1学年を中心に行った。その結果をもとに、2学年においても試験的に実施してもらった。また、1学年ではデータ活用に関する教職員研修と、学級対象のコミュニケーションスキルアップ教室を行った。

アセスの結果から、生徒は教師に信頼を寄せ、学校生活におおむね満足していることが分かった。学校生活において、学業に対し大きな不安を抱えている生徒が最も多く、次いで非侵害の関係や向社会スキルに問題を感じている生徒が多かった。また、他者とうまく関われないことを悩み抱えている生徒が多いようである。1学年では2回実施したが、要支援ゾーンにいた生徒が改善されていた例もあるため、学級経営に有効に活用してもらえたのではないかと思うが、一方で二回目でも新たに要支援ゾーンに入った生徒もあり、今後も継続して全体への支援が必要な状態である。

2 教職員研修

ア 『学校環境適応感尺度アセスの実施に関して』 9月、2月実施 実施学年対象

- ・アセス実施の理由と、検査の特徴、データの利用方法と利用上の注意点について
- ・結果分析（※2月の1学年については、1回目の結果との比較含む）
- ・質疑応答

イ 『コミュニケーションスキルアップの方法に関して』 11月実施 1学年対象

- ・コミュニケーションスキルアップ教室の内容と感想のシェアリング
- ・教室で日常的に実施できるコミュニケーションスキルアップの方法の紹介
- ・質疑応答

3 コミュニケーションスキルアップ教室

ア ねらい

学級内のコミュニケーションを改善すること。

イ 対象

1学年の1学級※アセス実施の結果と担任の希望

ウ 内容

(ア) 『こころのスキル コミュニケーション ～簡単なコツで人間関係が変わる！人と上手につながるヒント～』

① 「笑顔になると 色々とうまくいく ～体験スマイルトレーニング～（体験ワーク）」

- ・コミュニケーションをする際の姿勢や表情の重要性についての説明と実践。

② 「自分のコミュニケーションスタイルを見直そう（レクチャー）」

- ・ドラえもんのキャラクターをモデルとしたコミュニケーションスタイルの紹介と対応法。

(イ) 『こころのスキル コミュニケーション ～ほめっせーじとだめっせーじ～』

① 「笑顔になると 色々とうまくいく ～体験スマイルトレーニング～（おさらい）」

② 「ほめっせーじを大事にしたコミュニケーション（レクチャー）」

- ・日常ありがちなシチュエーションをモデルとして、どのようなコミュニケーションをするのがいいかをレクチャーした。

エ 成果

生徒は積極的に参加しており、事後の感想でも「今後に役立てたい」「自分の生活を変えたい」など好意的にとらえられており、担任からも日常に講師の言葉がいかされている状況の報告があった。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

不登校生徒数及び中途退学者数は減少した。次年度以降も、不登校及び中途退学の未然防止のための取組を行う。

イ その他の指標による評価

- ・保健室来室数及び相談者数は、学年ごとの合計数及び全生徒数いずれも前年より増加した。
- ・欠席日数については、増加した学年があれば減少した学年もあった。

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」は未実施であるが、「アセス」を実施した。

エ 生徒の変容した姿

- ・コミュニケーションスキルアップ教室を受講した学級の生徒は、内容を好意的にとらえ、自分自身の生活を向上させていこうという前向きな姿勢が見られた。また、受講した生徒から、他のクラスの生徒に、講座の内容が伝えられたため、他のクラスの生徒から講座を受講したいという希望が寄せられた。
- ・スクールカウンセラーとの面談は生徒から好評で、面談の回数にかかわらず、生徒の状況改善に役立った。スクールカウンセラーは教職員とも連携し、多方面からの援助に取り組んだ。

2 課題

ア ステップアップ・プログラムへの効果的な計画実施ができなかった。教育相談事業を円滑に進めるため、次年度以降の計画を十分に練る必要がある。

イ 教員側に教育相談事業に関する知識や理解があまりなく、生徒の援助体制が十分ではない場面があった。生活実態調査の実施時期や回数、処理の仕方などの体制づくりを含め、今後も研修を行い、多くの教職員の理解と協力を得る必要がある。

3 次年度に向けて

ア 生活実態調査を年間計画に位置付け、継続して生徒の実態を把握できるように努める必要がある。

イ 教職員に対する研修等啓蒙活動を継続して行うことにより、全職員と協力して生徒の支援を適宜行えるようにする。

北海道野幌高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 801名

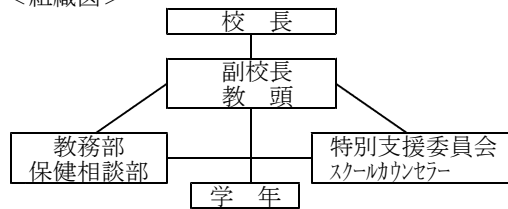
1 取組の特徴

生徒のコミュニケーション能力育成のためのコミュニケーションスキルトレーニングを計画的に実施するとともに、カウンセリングを通じて生徒の学校生活の適応能力を向上させる。

2 取組のねらい

基本的な生活習慣や人間関係づくりの能力など、社会適応力が十分身に付いていない生徒に対し、スクールカウンセラーと連携し、教育相談や人間関係構築の方法等の学習・体験の機会を設け、学校目標にある自立した生徒の育成を目指す。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月 スクールカウンセラーとカウンセリング内容の協議、生徒及び保護者へのカウンセリング</p> <p>5月 生徒及び保護者へのカウンセリング</p> <p>6月 生徒へのカウンセリング</p> <p>7月 薬物乱用防止教室
生徒へのカウンセリング</p> <p>8月 生徒及び保護者へのカウンセリング</p> | <p>10月 デートDV防止教室(1学年)
学校環境適応感尺度「アセス」の実施
生徒会リーダー研修
(ピアサポート、ボランティア活動)</p> <p>12月 ピアサポート・トレーニング</p> <p>1月 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施</p> <p>2月 子ども理解支援ツール「ほっと」の分析と活用の教職員研修グループエンカウンターの実施</p> |
|---|---|

4 取組の内容

- 1 スクールカウンセラーによる教員研修
 カウンセラー来校日にカウンセリングの手法等の研修を実施 (毎月1回)
 カウンセラーによる研修資料の配付
- 2 スクールカウンセラーによる保護者カウンセリング
 保護者の希望により、スクールカウンセラーが来校し、適宜カウンセリングを実施した。
- 3 学校環境適応調査「アセス」の実施 (11月)
 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施 (2月)

4 取組の内容

4 生徒会リーダー研修 平成25年10月3日（木）、4日（金）

ア ピアサポート研修

イ 老人ホームにてボランティア活動の実施

地域の老人ホームへの訪問やボランティア活動を通じて、異年齢の方との人間関係づくりの手法や奉仕活動の精神を学習し、生徒会活動に還元する方法を検討した。



リーダー研修会

5 性についての講演会（デートDV防止教室）平成25年10月22日（火）

北海道環境生活部くらし安全局の事業を活用し、1年生に対してデートDV防止教室を実施し、若者の人間関係の在り方について学習した。

6 ピアサポート研修 平成25年12月9日（月）

生徒会執行部を対象にカウンセラーによるピアサポート研修を実施し、人間関係づくりの手法をについて学習し、生徒会活動に反映させた。



ピアサポート研修

7 構成的グループエンカウンター 平成26年3月

1年生を対象に、スクールカウンセラーによるグループエンカウンターを実施し、自己発見や他者を尊重する精神と人間関係づくりについて学習する機会を設定した。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者は減少に至らなかったが、個々の生徒の人間関係づくりの悩みや困難を早期に把握し、不登校の兆候のある生徒に対し、即時に対応できるようになった。

イ その他の指標による評価

スクールカウンセラーと連携した生徒及び保護者のカウンセリングを実施し、生徒の抱える課題の把握と適切なサポートに努め、成果が見られた。

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「挨拶や感謝」など、「思いやり」の質問項目で高い数値となった。また、対人関係についての不安や緊張の度合いが高い数値となった。

エ 生徒の変容した姿

生徒同士がお互いを尊重する精神や、挨拶やその他コミュニケーションを通じて、より良い人間関係を築こうとする姿勢が見られるようになった。

2 課題

ア 教育相談等における教職員の組織的対応及び校内体制の強化

イ 子ども理解支援ツール「ほっと」を活用した生徒の実態把握、及びその活用に関する教員の研修機会の設定

3 次年度に向けて

ア 教育活動支援委員会を組織し、生徒の実態把握と個々の状況に応じた具体的な支援を実施する。

イ 教育相談の手法を取り入れた人間関係づくりの教員研修を実施する。

北海道有朋高等学校

課程 定時制(単位制)
 学科 普通・事務情報科
 生徒数 411名

1 取組の特徴 北海道医療大学との連携

- 1 臨床心理学科学生によるピアサポート・学習支援
- 2 スクールカウンセラーによるカウンセリング
- 3 スクールソーシャルワーカーによる生徒支援や関係機関との連携

2 取組のねらい

中学校時代の不登校経験者がほぼ半数、前籍をもつ生徒が約25%と、過去に多くのトラウマを抱えながら入学してくる生徒が多い。

いじめや学習の遅れなどによる自信喪失のため、授業の参加に意欲を失い、現在もそのことが原因で学校生活に支障をきたしている生徒が多い。そのような生徒にコミュニケーションスキルの向上によって自信を持たせ、より円滑な人間関係を構築できるよう支援する。支援に当たって、平成24年度から北海道医療大学の「臨地実習」に関わる学生の全面協力を受け、取り組んでいる。

<組織図>

サポート委員会

教頭2名、養護教諭2名、年次主任4名
 生徒指導部長、教務部長、該当担任で構成

サポート委員会支援方法

- ①ガイダンス ②コンサルテーション
 ③コーディネーション ④プロモーション

具体的支援方法

- ①スクールカウンセラー
 ②スクールソーシャルワーカー
 ③ステップアッププログラム
 ④若者サポートステーション
 ⑤特別支援教育パートナーティーチャー

⇔
 連携
 専門
 機関



校内研修会・職員会議・共通理解

⇔
 連携

保護者

3 取組の経過

- 1 平成24年度に特別支援委員会をサポート委員会に再編
 - ・各担任や年次からの要請、保護者等から希望があった場合にサポート委員会で生徒の実態にあった支援方法を検討し、具体的な支援を行う。
 - ア 特別支援教育パートナーティーチャー (札幌稲穂高等支援学校) 学習障害等が疑われる生徒の支援を相談
 - イ スクールソーシャルワーカー (北海道医療大学臨床心理学科)

- ウ スクールカウンセラー (北海道医療大学臨床心理学科)
- エ ステップアップ・プログラム (北海道医療大学学生の支援と協力)
- 2 平成24年度の取組

いじめは絶対にダメという意識を喚起するために、いじめ防止のアニメを制作した。パソコンを使用する人数に制限があったことから、参加人数が限定された。
- 3 平成25年度の取組

本校の取組について、多くの生徒が関わることができるよう、学生からの支援をピアサポートや学習支援に転換した。

4 取組の内容

○ 北海道医療大学臨床心理学科の学生を中心としたピアサポートと学習支援を行った。

- 1 ピアサポートと学習支援についてのPRポスターの作成と掲示
- 2 1・2年次の全HRを訪問し、ピアサポートと学習支援の実施のPR活動
- 3 ピアサポート10月23日(水)～12月4日(水)

- ・当初、1回2時間、5回を設定した。
- ・時間を大幅に超えて交流することもあった。
- ・最終日には、参加した生徒から自発的に大学生に色紙が贈呈された。

4 途中から、昨年度の実習生も加わり、参加生徒一人一人の要望に応じた個別の対応も可能となった。

5 生徒と学生それぞれから本取組の継続について要望があったため、大学側と相談し、2月まで8回実施した。

6 参加した生徒の様子

ア 最初は、大学生と話をすることに躊躇していた生徒も多かったが、大学生が参加生徒の一人一人のニーズに応じたコミュニケーション活動を進めてくれたこともあり、次第に生徒が引きつけられていった。

イ 生徒は知らず知らずのうちに人とのコミュニケーションをとることに対する抵抗感をなくしていった感がある。話をしたりゲームをしたり、学習支援を受けたり、歌を歌ったりしながら他者とコミュニケーションすることの楽しさを実感していったようである。

ウ 参加した生徒の多くが、様々な活動を通して、自分で知らなかった情報を吸収したり、勉強がわかったことに喜びを感じたり、悩みが解消されたりしたことに、大きな喜びを感じていた。参加した生徒は、今後もこのような活動があれば参加したいと思ったり、コミュニケーションを取ることに対しての不安感等が取り除かれたと思われる。参加した生徒の中には、大学生との触れあいによって人生観が変わったという生徒もいた。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数は、昨年度に比較して4割減少したが、不登校生徒の状況に大きな変化は見られなかった。

イ その他の指標による評価

ボランティア活動の参加者数は、昨年度比累計で2割以上増加した。

ウ 生徒の変容した姿

自分から出会いの場やコミュニケーションを求めて動こうとする姿勢や気持ちを少しでも持っている生徒に対して、ステップアップ・プログラムの取組は大変有効であった。参加人数が大きく増えるまでには至らなかったが、比較的年齢が近い大学生に、進路相談をしたり、大学生活について聞いたり、ゲームをしたり、試験前には学習支援を受けたりと楽しい時間を過ごしたため、次回を楽しみにしている生徒も多かった。

2 課題

本校入学をきっかけに登校できるようになった不登校経験のある生徒には、支援の手を差し伸べることができるが、学校に登校できない生徒に対してどのように支援をしていくか検討する必要がある。

3 次年度に向けて

次年度も大学生からの支援の継続について、大学側と確認しているため、今年度の成果を積み上げて、内容の一層の充実を図りながら進めていきたい。

北海道札幌北高等学校

課程 定時制
 学科 普通科
 生徒数 261名

1 取組の特徴

「人間関係づくりやコミュニケーションスキルの育成を図る」ことを目的とし、次の3点を重点事項として取り組む。

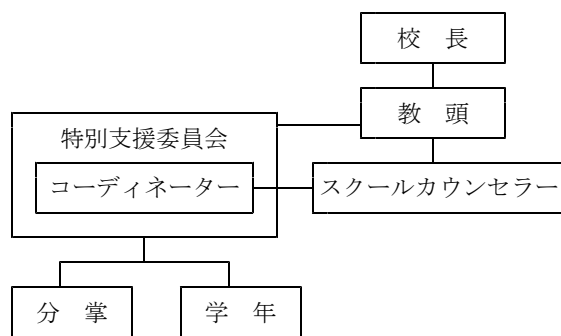
- 1 メンタルヘルスに関する取組
- 2 スクールカウンセラーを活用したコミュニケーション能力の育成を図る取組
- 3 スクールカウンセラーを活用した校内研修の充実

2 取組のねらい

本校には、下記に示すような生徒が多く在籍し、個に応じたきめの細かい支援とケアが求められているため、カウンセリングをとおして生徒の自立を促していく。

- 1 特別支援教育の対象となる生徒
- 2 中学校で不登校だったため、十分な学力が身に付いていない生徒
- 3 他者とのコミュニケーションを図ることが困難な生徒
- 4 家庭環境が劣悪で通学環境が整っていない生徒
- 5 様々な原因により不登校となる生徒
- 6 様々な理由により中途退学する生徒 (特に高校1年生)

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>5月 メンタルヘルス講話 (1学年集会)
 講師：山本 創 氏 (スクールカウンセラー)</p> <p>(5月～) 個別カウンセリング</p> <p>7月 アセスメントの実施 (1) (1学年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解支援ツール「ほっと」 ・実施後、分析結果を教職員で共有 <p>12月 校内研修会 (講演)</p> <p>講師：佐藤 由佳里 氏
 (北海道教育大学教授)</p> <p>講演題：「健やかな心を育てるために学校ができること」</p> | <p>2月 メンタルヘルス講話 (1学年)</p> <p>講師：富家 直明 氏
 (北海道医療大学教授)</p> <p>講演題：「こころの病は予防できる」</p> <p>2月 アセスメントの実施 (3年生)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解支援ツール「ほっと」 <p>2月 アセスメントの実施 (2) (1学年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解支援ツール「ほっと」 <p>3月 校内研修会 (ケース会議)</p> <p>講師：山本 創 氏 (スクールカウンセラー)</p> |
|---|---|

4 取組の内容

1 メンタルヘルス講話

ア 5月の第1回目は、本校のスクールカウンセラーが講師となり、カウンセリングについての講話と、メンタルヘルストレーニング（ストレスチェック）を実施した。

イ 2月の第2回目は、講師が学年担任とコミュニケーションを図りながら説明をしたり、生徒を指名してコミュニケーションを図ったりするなど、印象深い講話を行った。こころの健康を得るための具体的な「考え方」や「行動様式」のアドバイスを受けた。



2 校内研修

「ストレス」と「ストレスマネジメント」に関する講話を行った。「K J Q」を実際に行うとともに、リラックスについて「筋弛緩法」と「イメージ呼吸法」を実際に体験した。

3 アセスメントの実施

ア 7月と3月に、1年生を対象として、子ども理解支援ツール「ほっと」を実施した。学年全体のコミュニケーション能力について分析を行い、また、富家先生からのアドバイスをもとに、生徒個々の変化についても分析した。

イ 2月には3年生でも実施し、学年の傾向を分析し、今後の学年経営に資する資料とした。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

(ア) 中途退学者は、全体的に前年度から減少した。特に、1学年の現時点では中途退学者の減少が大きく見られるが、年度末での退学者の急増が懸念されている。

学 年	1年	2年	3年	4年	合 計
平成24年度	18	5	3	2	28
平成25年度	7	7	3	1	18

(イ) 不登校生徒数はどの学年も大きく減少しており、全体としても大きく減少した。

学 年	1年	2年	3年	4年	合 計
平成24年度	30	11	14	3	58
平成25年度	13	3	1	0	17

イ その他の指標による評価

1日当たりの欠席者数は、一昨年から昨年にかけて大幅に減少した。今年度は1学年で増加が見られ、全体的には微増した。

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

(ア) 【1学年】コミュニケーション能力が概して低く、どのように同級生に話しかけたり、仲間づくりをしたりすればよいかわからない生徒が多いこと。

(イ) 【3学年】シャイで仲間づくりが苦手な生徒が多く、人前で話すのが苦手であること。

エ 生徒の変容した姿

昨年に引き続き学校生活が非常に落ち着いている。授業への積極的な取組が見られ、全校集会時の整列・傾聴の態度は素晴らしい。特別指導の件数が大きく減少している。

2 課題

ア コミュニケーション能力の向上を図り、社会性を身に付けさせ、自立を促す必要がある。

イ 生徒に豊かな学校生活を送ってもらえるよう、他者を思いやる心や言動を身に付けさせる指導を行う必要がある。

3 次年度に向けて

ア スクールカウンセラーの計画的かつ効果的な活用を努める。

イ 校内研修の充実を図るとともに校外研修への積極的参加を促し、教職員のカウンセリングマインドの一層の理解を深める。

北海道札幌琴似工業高等学校

課程 定時制
 学科 工業科
 生徒数 162名

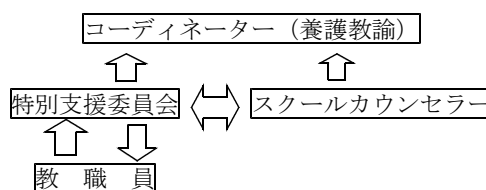
1 取組の特徴

生徒制作の映画やシアターゲームの実践後に行った、子ども理解支援ツール「ほっと」の結果をもとに、ねらいを定めたサイコエデュケーションによる集団カウンセリングを行った。

2 取組のねらい

DVD映像によるサイコエデュケーションを行うことにより、子ども理解支援ツール「ほっと」の結果から課題としてあげられた「騒がしいクラスにおける『8ルールやモラル』と「おとなしいクラスにおける『4 思いやり』『13 相談』『5 拒否』」の数値の変化を見ること。

<組織図>



3 取組の経過

4月15日	1 学年芸術 『授業開き』コミュニケーション講座	11月6日	全校集会 第2回コミュニケーション講座
5月29日	全校集会 第1回コミュニケーション講座	12月	スクールカウンセラーによる生徒・教員の面談
6月	スクールカウンセラーによる生徒・教員の面談	1月	演劇シアターゲームを通じたコミュニケーションスキルアップ講座 (本校生徒20名、他校生徒40名)
7月	スクールカウンセラーによる生徒・教員の面談		老人ホーム「慰問講演」(演劇部)
8月	スクールカウンセラーによる生徒・教員の面談	2月	スクールカウンセラーによる生徒・教員の面談
9月	スクールカウンセラーによる生徒・教員の面談		
10月	スクールカウンセラーによる生徒・教員の面談		

4 取組の内容

1 1 学年芸術「授業開き」コミュニケーション講座 (4月15日)

ア 目的

電子機械科・電気科をミックスして授業を行う芸術科の依頼により、高校生活をイメージし目標設定を促すことと、意見交換することで、仲間づくりの土壌を醸成する。

イ 実施内容

平成23年度の本事業における、本校制作の「ハッピーみらくるコミュニケーション」を視聴する。また、「アルバイト先の出来事・親」等の人間関係について、「友達・部活動」等の学校生活について、「感じたこと・気付いたこと・感想」等をシートに書き込み、グループディスカッションを行った。

ウ 生徒感想

見た目で決めつけるのはよくない。言葉一つで展開が変わる。相手の意見を受け入れるのは大事。人に感謝する。善悪の判断は大切。心の目が大切。

4 取組の内容

- 2 全校集会 第1回コミュニケーション講座（5月29日）
 - ア テーマ 「人生を開く鍵（かぎ）は、努力し続ける力」
 - イ 目的 「努力に価値がある・正しいことを正しいと表明できる」という集団の基礎的コミュニケーションを醸成すること。
 - ウ DVD内容 「理想のHR・負けない心・涙の結果とその値」「負けることは恥じゃない」「恥なのは負けて立たんこと」「明日は味方だ」「誠実に生きれば周囲は助けてくれる」
 - エ 生徒感想 いじめに勝つのは素晴らしい。人間性が一番大事。努力は報われなくても自分のためになる。
- 3 全校集会 第2回コミュニケーション講座（11月6日）
 - ア テーマ 「友情」
 - イ 目的 「友情」をテーマとして互いに意見交換をすることによるし、「日常でも真摯な意見交換」ができるコミュニケーションを醸成すること。
 - ウ DVD内容 「親子」「恩義・感謝・謙虚」「友情」「応援」
「実るほど頭を垂れる稲穂かな！！（恩義・感謝・謙虚）」「誰も相手にしなくなっても、俺がそばで応援してやる」
 - エ 生徒感想 親を大事にしようと思った。応援歌を作ってくれる友達がほしい。感謝を忘れず謙虚でいたい。
- 4 演劇シアターゲームを通じた
コミュニケーションスキルアップ講座（1月6日）
本校生徒20名、他校生徒40名の参加
- 5 老人ホーム「慰問講演」（1月11日）演劇部の活動



5 次年度に向けて

- 1 成果
 - ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移について、大きな変化は見られなかった。
 - イ 保健室利用者数及び一人当たりの欠席日数とも、少しずつ減少している。ボランティア活動の参加者数も増え、プログラムの効果は認められる。
 - ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルについては、ターゲットスキルとした「騒がしいクラスの『8 ルールやモラル』」と「おとなしいクラスの『4 思いやり』『13 相談』『5 拒否』」については、数値に若干の上昇が見られた。
- 2 生徒の変容した姿
劇的な変化を認めることはできないが、コミュニケーション講座等の感想の記述によると「とてもためになった」「物事をできるだけポジティブにとらえることを心がける」「どんなに辛くてもがんばり次第で必ず成功する」などの、素直な意見が多数あり、生徒の内面に講座の内容が受け止められているものと思われる。
- 3 課題
 - ア 個々の生徒の内面にある「ポジティブな感情」を一層表現させる必要がある。
 - イ 生徒間のコミュニケーションスキルを高めることにより、学校生活を一層充実させる必要がある。
- 4 次年度に向けて
 - ア 生徒・教師・学校のニーズを考慮しながら、学校の進むべき方向を示すような活動を行うこと。
 - イ 個々の生徒が、自身の学校生活や進路に今まで以上に目を向けるような活動を行うこと。

北海道余市紅志高等学校

課程 全日制
 学科 総合学科
 生徒数 169名

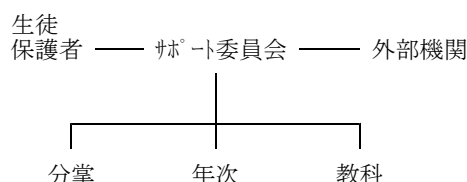
1 取組の特徴

平成22年度に管内唯一の総合学科として開校し、1年次生に必修科目「産業社会と人間」を学習させている。この科目の単元目標に、「キャリア教育の充実」と「コミュニケーションスキルの育成」を設定し、生徒のキャリア発達の向上を図るとともに、コミュニケーション能力育成のトレーニングを計画的に取り入れた。

2 取組のねらい

人間関係を上手に構築できないことにより不安定な心理状態となり、高校生活を有意義に送ることができない生徒に対して、授業や地域との交流、ボランティア活動等を通じてコミュニケーション能力を向上させることを目的として、取り組んでいる。

<組織図>



3 取組の経過

4月	コミュニケーショントレーニング テーマ「自己理解・他者理解」 通学路清掃	スクールカウンセラーによる支援が必要な生徒に対する面談 学校祭
5月	宿泊研修 「構成的グループエンカウンター」	8～12月 進路学習を通しての自己理解・他者理解
6月	コミュニケーショントレーニング アサーショントレーニング 余市養護学校での花壇作りと運動会ボランティア アセスの実施	9月 障がい者施設との交流会 体育祭
7月	ピア・サポートトレーニング 高齢者施設との交流会と幼稚園の花壇整備	11月 余市養護学校との交流会 12月 総合学科発表会 球技大会 余市養護学校との交流会
		1月 専門家による教員研修の実施 アセスの実施

4 取組の内容

(1) コミュニケーショントレーニング

ア ねらい エンカウンターやワークショップ、ワークシート作成などの各種アクティビティを通じて、自己理解・他者理解を深めるとともに、円滑なコミュニケーションやアサーションについての意識を高める。

イ 対象 1年次

ウ 内容

- ・ 4月17日「自己理解・他者理解」

ワークショップで自己表現を行いながら、自分を理解する。クラスメイトにインタビューして互いを知り、相手の気持ちを考える姿勢を身に付ける。

- ・ 5月14日～16日 宿泊研修において「構成的グループエンカウンター」を実施

- ・ 6月12日「コミュニケーショントレーニング①」

スクールカウンセラーから「聴く」ことについて講義を受けた後、グループに分かれて「結婚の条件」「子育ての条件」について話し合いを行い、思い込みからの解放、自己の価値観の修正などの意識変化を体験し、自他尊重の意識を高める。

- ・ 6月19日「コミュニケーショントレーニング②」

意見の対立の架空場面を設定し、グループワークを通して、両方の意見を紡ぎ合わせることで対立解消をしていくことをトレーニングする。

- ・ 6月26日「教育相談講話」

外部講師による構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニングを実施し、3ヶ月間のコミュニケーショントレーニングを経て、グループワークを楽しみ、他者の意見を尊重するなど自分自身の成長を実感する機会とする。

エ 成果と課題 年度初めからの計画的なコミュニケーショントレーニングを通して、生徒は対立を回避したり解消する話し方を身に付け、学校祭や体育祭等の行事に協力的に団結して取り組む姿が見られた。中学校との連携を一層図るなど、不登校傾向の生徒への効果的な指導が課題である。

(2) ボランティア活動

ア ねらい

生徒会やボランティア事務局と連携して全校的にボランティア活動に取り組むことで、共同の意識や奉仕の精神を養う。

イ 対象 全年次

ウ 内容

- ・ 4月26日 春の通学路清掃活動
- ・ 6月 2日 幼稚園の花壇整備
- ・ 6月 8日 余市養護学校「運動会」
- ・ 6月12日 余市養護学校「花壇苗作り交流会」
- ・ 6月22日 余市町のボランティア講習会

- ・ 7月 6日 ぽれぽれペンギンクラブ
「ソーラン祭り仮装パレード」
- ・ 7月21日 仁木長寿園・やすらぎの里祭り
- ・ 7月27日・28日 いけまぜフェスティバル
- ・ 9月14日 余市豊浜学園秋祭り
- ・ 12月7日 障害のある子と遊ぶ「ムーブメント体験」
- ・ 12月8日 余市養護学校「もちつき体験」
- ・ 1月29日 町内除雪



エ 成果と課題



回数を重ねるごとに参加生徒数が増加している。生徒たちは、年次の枠を超えて人間関係が深まり、幼稚園から高齢者まで幅広い年齢の方たちと触れ合うことで、ボランティア活動に参加する喜びを感じている。

ボランティア事務局が主体の活動であり、参加している生徒は限定されるため、分掌や年次、生徒会との連携を図り、全校的な取組に広げていくことや、更にはコミュニケーション学習とのつながりを持たせることでより多くの生徒が自己有用感を持てるようになることが課題である。

(3) 学級適応検査等の状況

ア ねらい

年2回アセスを実施することで、さまざまな活動の事前と事後での集団適応状態を把握するとともに、支援を必要としている生徒の支援に役立てる。

イ 対象 1年次

ウ 日時 1回目：6月12日実施 2回目：1月31日実施

エ 成果と課題

適応次元	要支援群（6月）	要支援群（1月）	増減（△）
生活満足感	16.0%	8.0%	△8.0ポイント
対人的適応	24.0%	4.0%	△20.0ポイント
学習的適応	0.0%	6.0%	6.0ポイント

対人的適応と生活満足感では、要支援群は減少しているが、学習的適応で要支援群が6.0ポイント増加している。これは、学習が進むにつれて難しいと感じている生徒が増加しているにも関わらず、教師や友人のサポートをしっかり受け止めていることから、生活満足感が高まっていると考えられる。

また、生徒一人一人の適応度を把握することができるため、要支援生徒へのスクールカウンセラーによる個別面談を実施することができた。しかし、教職員で「アセス」や「ほっと」の研修会を実施することができず、授業や学校行事等の活動に活かすことができなかった。今後は、教職員の研修の機会を確保することや早い時期に「アセス」や「ほっと」を実施し、学校の様々な場面で生徒理解に努めることが課題である。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者、不登校生徒数ともに昨年度より若干増加しているが、その生徒たちのほとんどが中学校から不登校傾向であり、コミュニケーショントレーニングに参加することが困難であった。一方で、中学校で不登校傾向にあった生徒が、コミュニケーショントレーニングやボランティア活動を通して、円滑な人間関係を築き、ほとんど欠席することなく登校した生徒もいる。

イ その他の指標による評価

保健室利用者は昨年より倍増しているが、これは1年次の利用が多かったことと、2・3年次の相談件数が増加したことによる。しかし、1年次の利用は前期に集中し、後期は激減した。入学直後は不応傾向を示したり、安易な利用を繰り返していた生徒が、コミュニケーショントレーニングを重ねる中で、徐々に適応感を増し、仲間の協力も得ながら克服した結果と言える。また、2・3年次における相談内容は、「家庭問題」や「進路」が多く「友人関係」の相談は1年次から比較すると減少している。また、似た悩みを持つ友人同士で来室し、ピア・カウンセリングをすることで、解決（解消）しているケースも多く見られ、コミュニケーショントレーニングの成果が表れている。

欠席数の平均も昨年度より増加しているが、これも中学校から欠席が多かった生徒が多く入学してきたことによるもので、後期には減少している。コミュニケーションの力が身に付き、適応感が増したことにより、欠席が減少した。

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

今年度は、子ども理解支援ツール「ほっと」の活用に係る計画の作成に終始し、活用・分析までは行えなかった。6月と1月に実施した「アセス」では、「向社会スキル」が大きく向上した。

エ 生徒の変容した姿

入学当初は例年以上に不応傾向が多かったが、前期の前半に集中してコミュニケーショントレーニングを積み重ねた結果、7月の学校祭や9月の体育祭では仲間と協力して創り上げたり感動したりする姿が見られるようになった。また、ボランティア活動にも積極的に参加し、特に、除雪ボランティアでは地域住民との交流も深まり、自己有用感を感じている生徒が増加した。

2 課題

ア 子ども理解支援ツール「ほっと」に関する教員研修を実施することができず、「アセス」のみの実施となった。

イ 1年次の「産業社会と人間」や各HR、行事での取り組みに限定されており、各教科で活かすことができなかった。グループワークやペアワークなどを各教科でも可能な限り取り入れていくことで、学習への不応感を減少させることが課題である。

3 次年度に向けて

ア 次年度は早い時期に子ども理解支援ツール「ほっと」を活用し、全教職員で共通理解を図り、生徒理解に活用する。

イ サポート委員会が中心となり、各教科でコミュニケーションアップの取組を行う。

北海道倶知安農業高等学校

課程 全日制
 学科 生産科学科
 生徒数 83名

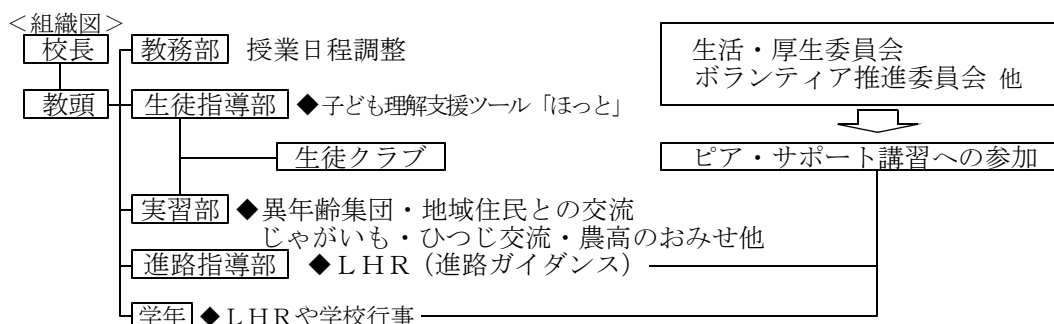
1 取組の特徴

ピア・サポート活動を実施する中で、生徒の人間関係形成能力を培うとともに、地域・他校種・異年齢集団との交流の中でコミュニケーション能力を育成する。また、教員が、子ども理解支援ツール「ほっと」の結果をアセスメントし、生徒が抱える問題を早期に発見することで、生徒の集団の中での育ちを効果的に支援する。

2 取組のねらい

本校は、コミュニケーション能力育成・人間関係づくりのためのスキルアップを目的としたピア・サポート活動の充実を図ることにより、生徒の基本的なコミュニケーションスキルを高める取組を継続的に行っている。

今年度は、「ピア・サポーターの育成時間・活動時間の確保」、「地域等と連携した活動の充実」など、昨年度の課題を踏まえ、ピア・サポート活動の時間を「ホームルーム活動」や「学校行事」に位置付け、ピア・サポーターの活動時間を確保したり、地域等との連携に基づく多様な交流の機会を計画的に行っている。生徒の社会性の育成や、集団内における生徒の良好な関係づくりのために、校内の教育相談体制の構築に加え、生徒の自己肯定感や自尊感情を高揚させたり、生徒に他者を理解する力の育成に向けた取組の一層の推進を目指している。



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>4月 入学式でのピア活動
職員研修(教育相談)</p> <p>5月 倶知安幼稚園とのひつじ交流①
子ども理解支援ツール「ほっと」
草花・野菜苗販売実習
北陽小学校とのじゃがいも交流①
教育相談①
職員研修(特別支援教育)</p> <p>6月 進学ガイダンス(1・2年)
農高のおみせ(～12月)
町内各所花壇造成
町内中学生農業高校体験学習
手稲養護学校運動会ボランティア
手稲養護学校交流会</p> <p>7月 北陽小学校とのじゃがいも交流②</p> | <p>8月 町内祭典での販売実習
思春期ピアサポーター養成講座</p> <p>9月 北陽小学校とのじゃがいも交流③</p> <p>10月 中学生一日体験入学でのピア活動
北陽小学校とのじゃがいも交流④
教育相談②</p> <p>11月 子ども理解支援ツール「ほっと」</p> <p>12月 進路ガイダンス(1・2年)
倶知安幼稚園とのひつじ交流②</p> <p>2月 教育相談③</p> <p>3月 倶知安町雪トピアでの販売実習
生徒クラブリーダー研修</p> |
|---|--|

4 取組の内容

ピアサポート活動を中心としたコミュニケーション能力育成・人間関係づくりのためのスキルアップを目的として、全校生徒を対象に【3 取組の経過】にある取組を実施した。主な内容は次のとおりである。

(1) 入学式におけるピア・サポート活動

ア 日時 4月9日(火)

イ 対象 新入生

ウ ねらい 新入生の緊張感を緩和し高校生活がスムーズにスタートできるよう支援する。

エ 内容 ピア・サポーター(ピア・サポート・トレーニングを受けた2・3年生)が、新入生や保護者への挨拶や、受付・控室への案内・誘導を行う。



オ 成果と課題

ピア・サポーターが、新入生や保護者と積極的に関わることで、新入生からは「在校生のおかげで緊張がほぐれた」などの感想があった。準備時間の確保が課題である。

(2) 「学級適応検査等の状況」：子ども理解支援ツール「ほっと」の実施

ア 日時 5月8日(水)、11月13日(水)

イ 対象 全学年

ウ 検査結果

1年生 全体的に全道平均に近い水準である。発言や説明、助言や注意、学業で全道平均より低い。一方でルールやモラル、自律といった項目で全道水準を上回る。

2年生 全体的に全道平均のSS50～53の範囲に分布しているが、助言や注意の項目で少々全道平均を下回る。

3年生 リーダーシップと相談の項目を除くとSS52～56の範囲に分布しており、全学年で最も高い。

エ 分析結果

入学後、農業実習や地域行事への参加等に加え、本プログラムの活用により生徒の確実な成長が見られたが、このことが数値として表れている。

(3) ピア・サポート・トレーニング

ア 日時 10月5日(土)・6日(日)、11月12日(火)・13日(水)

イ 対象 ボランティア推進委員及び生活・厚生委員他希望者

ウ ねらい ピア・サポート活動の実施に向け、基本的サポート手法を身に付ける。

エ 内容

- ①自他理解 ②コミュニケーション・スキル ③アサーション ④ソーシャル・スキル
- ⑤ストレスマネジメント ⑥アンガーマネジメント ⑦対立の解消 ⑧情報の扱い方

オ 成果と課題

基本的スキルを学び今後の活動に対する意欲が高まるとともに、異学年間の交流が深まった。生徒会執行部の生徒が多く参加しており生徒会活動にも有益だが、活動時間の確保が課題である。

(4) 校内研修

ア 日 時 11月8日(金)

イ 対 象 教職員

ウ ねらい 本校職員が生徒理解を多面的に行うための手段として、カウンセリングマインドの醸成とその手法を学ぶ。

エ 内 容 教育相談の在り方、発達障がいの理解について。

オ 成果と課題

スクールカウンセラー・臨床心理士の右田永子氏による研修を実施し、本校生徒の実態についての分析や、発達障がいのある生徒への対応方法について理解を深めることができた。

(5) 中学生一日体験入学でのピア・サポート活動

ア 日 時 10月9日(水)

イ 対 象 体験入学に訪れた中学3年生

ウ ねらい ピア・サポーター(全学年)の生徒が中学生に対してピア・サポート活動を行い、中学生を支援するとともに、ピア・サポート・トレーニングの成果を確認する。



エ 内 容 ピア・サポーターが受付、誘導、昼食準備など一日体験入学の実施に協力する。参加者の支援をすることにより、ピア・サポートの成果を確認する。

オ 成果と課題

引率の中学校教員からも高く評価され、ピア・サポーターとしての成果を確認することができた。緊張した中学生に対する支援が成功したことにより、ピア・サポーターの生徒は「参加して良かった」との感想を述べ、自信を持つことができた。

(6) 手稲養護学校交流会

ア 日 時 6月28日(金)

イ 対 象 手稲養護学校生徒

ウ ねらい ピア・サポーター(全学年)の生徒と手稲養護学校の生徒が交流会において、ピア・サポート活動を行い、手稲養護学校生徒を支援するとともに、障がいのある人への関わり方について学ぶ。



エ 内 容 ピア・サポーターが校内の誘導、交流イベント、昼食準備などを企画・実施し、参加者の援助をすることでピア・サポートの成果を確認する。

オ 成果と課題

障がいのある人との関わりの中で、サポートの仕方などを臨機応変に変えなくてはならず、相手に合わせたサポートの重要性について学ぶことができた。

多様な障がいに対するサポート方法など、学習時間の確保が課題である。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者及び不登校生徒数の推移

本事業の取組により、中途退学者、不登校生徒数ともに少ない状況が継続している。

イ その他の指標による評価

- ・保健室来室者数（H25（12月末）201名、H24（12月末）：445名、H23：612名）
- ・一人当たりの欠席日数
H25： 1年 2.9日、 2年 3.2日、 3年 1.9日
H24： 1年 5.4日、 2年 2.5日、 3年 4.2日
H23： 1年 8.5日、 2年 5.2日、 3年 2.9日

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・1年生 全体的に全道平均に近い水準である。発言や説明、助言や注意、学業で全道平均より低い。一方でルールやモラル、自律といった項目で全道水準を上回る。
- ・2年生 全体的に全道平均のSS50～53の範囲に分布しているが、助言や注意の項目で少々全道平均を下回る。
- ・3年生 リーダーシップと相談の項目を除くとSS52～56の範囲に分布しており、全学年で最も高い。

今年度から子ども理解支援ツール「ほっと」の活用し、生徒についての分析を行った。

次年度は、結果をきめ細かく分析し、学習に対する意欲や進路実現に向けてより精度の高い指導を行うなど、より多面的な活用を推進する。

エ 生徒の変容した姿

- ・ピア・サポート活動の実施により、生徒間の人間関係が改善され、相手を思いやる気持ちやコミュニケーション能力の向上が図られたことで、学習やボランティア活動、学校行事に積極的に取り組む生徒が増加した。
- ・学年が進むにつれてコミュニケーションスキルが向上し、人間関係のトラブルが少なくなるとともに、トラブルへの対応力が身に付いた。

2 課題

ア スクールカウンセラーの効果的な活用が必要である。

イ ピア・サポーター育成に向けたトレーニング時間の一層の確保が必要である。

ウ 生徒の実態や子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を踏まえ、支援が必要な生徒に対して、教員のより適切な指導が必要である。

3 次年度に向けて

ア スクールカウンセラーの有効活用に向けた校内体制を整備し、スクールカウンセラーと教員が持つノウハウや知識を組織的に共有し、活用する。

イ ピア・サポーター育成に向けたトレーニング内容や活動期間を、年度当初に計画し、活動時間を確保するとともに、ピア・サポーター養成プログラムの在り方を研究する。

ウ 校内研修をより充実させ、子ども理解支援ツール「ほっと」の効果的な活用法に向けた研究を推進するとともに、教員が「ほっと」をもとに、生徒の実態を把握し、適切な指導ができるようにする。